

は十一月二日戦死されました。

私は昭和十七年十二月除隊となり教習に凱旋しました。その頃はまだ戦勝気分があつて大歓迎を受けました。家へは出征時のこだわりもあつて全く連絡せずいきなり帰つたのでびっくりしたようです。仏壇には影膳が供えてありました。除隊後、大津の山添翁條という飛行機の部品を作る軍需工場に勤め、組長から班長と出世して五十人の工員を使つていましたので、終戦まで召集はありませんでした。このため私は結局実役で丸四年間軍隊にいたこととなります。終戦後は岩本家に養子に入り、山本から岸本に姓が変わりました。農協組合長等を歴任し、現在は草津市の農業委員や町内会長をやっています。

フィリピン生き残り

盟兵団の通信兵

秋田県 鈴木寅吉

私は大正七年一月七日、秋田県山本郡二ツ井町小掛字沢田の農家で生まれ、父に付いて樺太へ五年ぐらい、満州に七年いました。木材の仕事をしたり、道路造りしたため土木作業に転向しました。満鉄の下請けなど、林野局出張所の森林鉄道の路盤工事をしました。

昭和十三年徴集だが、小学生の時、高い所から落ちて、右腕が上がらないので補充兵でしたが、昭和十九年三月十五日、秋田市の東部第五七部隊（歩兵第十七連隊留守隊）に教育召集を受けました。検閲後、営内で充員召集となり、一晩で弘前へ。翌日、完全軍装で臨時列車に乗り広島まで行ったのだが、暑いのには防護上窓の鑑戸は閉めたままでした。

一週間、宮本旅館に泊まり、その間、上陸演習とか、

船が沈没した時の演習をしていました。

宇品出帆は昭和十九年六月二十日頃だと記憶するが、部隊は独立混成第五十八旅団、盟第七二〇三部隊という。旅団長は佐藤文造少将で茨城出身の方だと聞いたが、私は旅団の通信隊に配属されました。

船は、大阪商戦の「東山丸」という約七千トンぐらいの新造船。十一隻で船団を組んで、フィリピンのマニラ港へ向かったのだが、台湾の台北沖で一晩停泊、パシー海峡で一隻やられた。大体、船団の半分着けば良いと予定していたらしいが、その時、第七艦隊がサイパン総攻撃中だったので、逆にフィピン附近は手空きとなり、幸いにして、残る十隻は無事マニラへ着くことが出来たのです。

私は、通信兵だったので、その情報がよく判っていた。勿論一般の兵隊は判りません。それでも輸送船は船倉に蚕棚みたいなものを造り、昼一枚に五〜六人詰め込まれ横になることも出来ない。私等二〜三人の通信兵は作業を絶えずするので船の操舵室の後が勤務場所だったため随分助かりました。

マニラへ寄港し他へ行く船団の中には、三回も沈められたのもあったという。そのため、マニラで再編成された部隊が多かった。我々の盟兵団は無疵だったため、主幹となった。我々通信、特に有線班だから常に司令部と行動を共にしていました。

マニラでは、リザール球場に一週間ぐらい泊まって、船から資材を降ろしたりしていた。その後、高橋少尉を長として下士官一名、兵三名が有線班として尖兵となり駐屯地へ向かった。私は高橋隊長とは気が合ったのか、階級抜きで付き合っていたので、この人とは一緒に帰りたいと思っていたが、不幸にも、最後は栄養失調で亡くなれてしまいました。

我々通信隊、高橋少尉以下は、サンフェルナンドを通過してウミンガへ設営に行った。そこは、ルソン島の中心、バギオの手前ウルダネガタに着いたが、標高二千メートルの高地バギオへの登り口だったと記憶するが、キャンプワンともいった。

そこで暫く駐屯していたが、その頃になると戦局は益々悪化し、九月には米機動部隊が多数来襲した。多

勢に無勢というか、日本空軍も、艦船も大損害を受け、レイテ島に上陸。天王山といわれたレイテは完全に占領されてしまったわけです。当時我々通信隊といえどもそのような戦局を知ることにはなかつたのです。

昭和二十年一月七日頃でしたか、正月なので通信隊は宴会をやっていた。私は司令部近くで電話の交換勤務をしていた時、ダモルブンドックから緊急電話があり、

「三百からなる船団を発見、大機動部隊マニラ沖を北上中」

という。私は直ちに通信隊長に電話をしたが、宴会中で電話に出ない。そこで軍司令部へ直接電話をしたらどうやら通じた。

司令部から、「全員配置につけ」という命令が各隊へ伝えられた。その日一月七日は、私の誕生日だなど感じたので今でも忘れず記憶しています。各隊は司令部命令のごとく、その朝までに全部配置を終わった。私は、さすが日本軍だなと思いました。私はその時、若い時から樺太や満州という外地で働いていたので、

「いよいよ来たか」と度胸を決めた。

我が通信隊も、その命令に従い、完全武装をして戦闘開始を待った。そのうち敵機の空襲が激しさを増してきた。その時、リンガエン湾には敵の艦船が百隻いたという。サンフェルナンドはフィリピンの西海岸、リンガエン湾の北にある街です。日本の特攻機が行くが、艦砲射撃や対空射撃の弾幕で、敵艦の上へいくまでに落されてしまう。また、グラマン機が、待ち受けていて激しい空中戦をするが、敵機がはるかに優勢で、我が特攻機は次から次へと撃墜されてしまった。

我が盟兵団は、リンガエン湾の北部、サンフェルナンドのキャンプの守備を昭和二十年三月ぐらまでしていたが、米軍の上陸は一月九日で、マニラは三月に完全占領されてしまった。我が部隊は命令により三月中頃、バギオに向かって退却しました。

その少し前だったか、工兵隊が、敵の戦車が来ると、たこ壺から破甲爆雷（磁石付）を持って戦車に跳び込んでいくのを見た。工兵がやられたら、敵の戦車は我々を攻めて来る。我々もやがては工兵と同じになる。

これも宿命だと覚悟を決めたが、我々は敵から離脱することが出来た。

通信隊は常に司令部と交信していた。キャンブワンにいた時、日本軍は退却ばかりしてはならないということで、敵の司令部の電話線を切りに敵陣地に侵入することになった。しかし、昼間は攻撃が激しいので夜実行することになった。軍の命令である以上通信線を切らなければならない、しかもその証拠として、切った電線を持って帰らなければならなかった。

私は四回ほど、敵の第一線に侵入して切断に行ったから、一番多くやった方だ。ある時、見習士官と五名程で潜入したことがあったが、見習士官もやはり命は惜しく、目的地まで行かずに帰って来たことがある。

当時、私は二十五〜六歳、見習士官は二十二歳ぐらい、しかも戦闘経験も少なかったのだから、今思えば無理は無かった。

兵団司令部は、バギオとサンフェルナンドの手前のナギリアン街道の谷間にしばらくいたが、三月過ぎると食料が無くなり、各隊は自給自活をすることになった。

た。稲の穂を手でこいで、粃にし、火を炊いて鉄板の上に載せ乾燥させ、鉄帽の中で搗いて米にした。

私は常に軍足（靴下）に米を詰め、旅団長の佐藤閣下から頂いた煙草を背のうに入れ、私の死骸を見た人は、実家へ知らせてくれと、住所、氏名を書いたものを入れておいた。もし死んだら、米と煙草を上げるから、故郷に知らせてくれというわけでしたが、私は生きて帰ってきた。当時の戦友で今も生きている者もあり、戦友会会長は、田沢湖の田口隆成さんで、今も健在です。

フィリピンのバギオは、標高二千四百メートルの高地で、八月でも朝は薄水がはるので、避暑地だった。そこに山下奉文將軍がおられ、將軍は毎日寝ていたので、日本は負けると思っていたのだろう。

日本軍は三八式歩兵銃、米軍は自動小銃、M戦車は大きく日本の戦車は歯が立たない。飛行機は、昭和二十年正月頃二〜三回見ただけだった。米のグラマン戦闘機を重機関銃で射って当たったが、貫通出来ないから、操縦者に当たらなければ駄目だった。

敵の攻撃は砲、爆撃だが、こちらからは敵のいる場所が判らぬのに弾が飛んで来る。昼夜の別なく、三分ぐらいの間隔で射って来るそのため、重なった日本軍の屍を越えて退いた。死体の腐った臭いが鼻をつく、その中を撤去というより逃げていった。昼間は進めないで、ポンドック街道の撤去はほとんど夜行軍でした。

通信隊も、もう有線が使えないというより、機器が無かった。司令部から、班長集合があると、徒歩で命令受領に行かねばならない。通信隊もただ生きるため、自分たちの食料を確保するだけだった。命令は「戦況が更に悪く、転進、退避」ということだった。

当時は階級ではなく、健康で物を獲ることの出来る（山の中での感）者が上だった。私は馬も水牛も豚も獲ったし、解体も出来たが他の人は出来ない。そのため、肉、骨、心臓、肝臓などよくとった。野菜は現地人の畑からさつま芋や蔓や南瓜など獲ったし、最後まで粉末味噌、醬油、塩を若干持っていた。

盟兵団の中でも通信隊員は比較的生き延びている。

亡くなった人は華々しい戦死は比較的少なく、マラリアや栄養失調が多い。食料は自分で獲らねば生きていけない。食料を獲りに出ても、自分で獲った物は先ず自分の口に入れ、野鶏でも、羽をむしって先ず生のまま食べた。残った物を隊に持って帰る。私は豚の皮や脂肪をとって置いて食べた。とに角健康の者は生き残った。そのため私は生き残ることが出来たのです。

それと同時に生き抜くという精神力が有るか無いかです。私は一番先に申したように、家の事情で高等小学校卒業前に、父と一緒に樺太（サハリン）や満州に渡った。その時も食うのが先でした。また、気の荒い無法者たちの中での仕事、若気の至りとは申せ、悪に対しては徹底的にやっつけ、身を立てた。そんな気性だったから、フィリッピン五十何万人（外地で最も多い）の戦没者の中に入らず、遣い上がっても生き抜いたのだと思います。

終戦は無線の傍受で八月十六日に知りました。これで内地に帰れると思った。八月十二日、十三日頃から米軍の戦闘機はほとんど飛ばない。四発のダグラス機

だけだったが、終戦後家に帰ってからも、飛行機の爆音がすると身が縮んだものです。

終戦からは火を炊けるようになったが、そこに約一か月以上いたと記憶しているので、山を下ったのは九月末か十月頃でした。道路に米軍のトラックが待っていて、日本兵を武装解除してサンフェルナンドまで送られ、その後は無蓋貨車に乗せられてマニラへ連れられていかれました。その間に比島人から石をぶつけられたが、米兵は怪我をしないよう守ってくれた。

日本人は、バギオの幕舎に入れられたが、米軍の管理は八万人ぐらいという話でした。予想ではそのうち生き残れるのは三万ぐらいということだった。

私は収容所で炊事班長をやったので戦後助かった。食べさせる物が、鮭缶に雑炊一杯、馬鈴薯二個が一食だった。今まで、食べる物もない山の中の生活だったので、いっぺんに食べさせると体が悪くなる。そのため二週間ぐらいは雑炊で、その後は普通の飯を食べさせました。

マニラ郊外の収容所は、カランバンという場所附近

くに湖がありました。草原の中の作業場は金網を隔てて隣は一般の民家であったので、物々交換をしたこともあったし、そこで三人ぐらい同郷の人がいました。収容所では演芸会などやって、段々心も慰められたし、食料も充分ではなくても補給され、体が回復する者もいて、余り死ななかつたようです。

昭和二十一年十月二十日頃、マニラで乗船した。船の中でも、小、中隊をつくり、私は第五六小隊長をして名古屋で下船し復員したが、船中では、何もゴタゴタは起きず、別れる時「小隊長、お世話になりました」と親しまれ、協力して頂いてお別れをしました。名古屋から東京―秋田と乗り継いで家に帰ることが出来ました。

思い出せば、フィリピンの時、「皆で食べて、たとえ一日でも生き延びて一緒に帰ろう」といって戦友を励まし続けていた。その恩恵の報いで、どうやら生きて帰ることが出来、今でも元気で幸せに生きています。思っています。件にもそのように言い聞かせ、一人前に勤務をしています。

このような幸せは、私の身代わり、犠牲になって死んだ戦友、面倒を見た人が、私や家族を守ってくれて
いるのだと、毎日感謝していています。